

## 記憶による過去の清算と克服

—— ミロ・ドールによるヨーロッパの架橋の構築 ——

生 田 眞 人

### 要 旨

本論考では、ある意味で最も典型的な「中欧ヨーロッパ人」といえるミロ・ドール（1923 - 2005）がたどった人生と、彼が創作してきた作品群をとおして、ドールの汎ヨーロッパ文化への貢献の足跡をたどる。

日本ではほとんど知られていない作家なので、本論ではまずミロ・ドールの略歴を紹介し、作家としてのドールに関しては彼の代表作である『思い出のほかには何もなし』、『休暇中の死者たち』、および『白い町』の解釈を通して作品の意義を考察する。あわせて、作家としてのドールのヨーロッパの各地域間の相互交流への貢献についても考察する。

ドールの政治分野での活動も重要なので、作家としてのドールと関連付けて、彼のベルグラードでの親ナチ・セルビア王政への抵抗運動も紹介する。さらにウィーンに定住してからのドールに関しては、より大きな「故郷」を求め、さらに自らのよって立つアイデンティティーの根拠を求めての彼の作家活動と政治的行動を相互に関連させつつ考察する。

キーワード：過去の克服（清算）、ミロ・ドール、「記憶」、ユーゴスラヴィアでの抵抗運動、ウィーンとベルグラード

### 前書きに変えて

本論考で考察の対象とするミロ・ドールは、本名がミルティン・ドロスロヴァッチ（Milutin Doroslovac）で、ミロ・ドールはペンネームである。彼の転変の人生は彼の作品内容と密接な関連があるので、彼の生誕より死まで、ここで簡単にその足跡をたどっておきたい。

生地はハンガリーのブダペストで、幼年期には父親が医者として研修と勤務で多忙だったため、当時ユーゴスラヴィア領のバナートにあった大ベチュケレク（Großbetschkerek, 現在の名称はズレニャニン [Zrenjanin]）で主として祖父母に養育された。1933年にはベルグラードに移住、そこで日本流に言うところの中学校と高等学校に通った。ドールはこの時期十代半ばで学校新聞などに詩を中心にエッセイなど作品を発表していった。政治活動にも早くからのめりこみ、当時の王権専制政治のユーゴスラヴィア（セルビア）に対しての反体制運動に加担したということで、高校生時には放校処分を受けている。共産党青少年グループのメンバーとして、ナチへの抵抗運動を行っているさなか、ユーゴの特高警察に逮捕された（1942年）。まもなく仮釈放となるが、それは恩赦ではなく、体制側が労働力を確保する目的での判決であり、強制労働従事者として、ヒットラーに併合されていたオーストリアのウィーンへ、強制移送された。終戦

に近い1944年頃から軍需工場での強制労働に従事するかたわら、演劇学とフランス・シュールリアリズム文学を研究していたが、再逮捕されてゲシュタポ(ドイツの国家秘密警察)へ引き渡され、ウィーンの刑務所内で終戦を迎えることになった。その後、ドールにとってウィーンが死に至るまでの主要居住地となったことは事実であり、作家としてもドイツ語を主要言語として選んだが、それにもかかわらずウィーンは長く住み続けてもドールにとって、「このたまたまの、当面の間の住屋(すみや)」<sup>1)</sup>であった。

ウィーンの雑誌などにドイツ語で寄稿し始めるのは戦後になってからで、この頃から50年代前半が作家として生きていこうとするドールの本格的な修行時代である。作品としては別名「ユーゴのサガ」とも言われる三連作小説が代表作である：『原題：休暇中の死者たち(Tote auf Urlaub)』(1952年)；『思い出のほかに何もなし(Nichts als Erinnerung)』(1959)；『白い町(Die weiße Stadt)』(1969) さらに、『ウィーン, 1999年7月(Wien Juli 1999)』(1997)は、内容として主人公にライコウを設定し、三連作につながる作品で、強権政治の現代と近未来を描いている。

政治・社会・文化評論の分野でもドールは卓抜なエッセイ集を発表している：『ウィーンへの旅とそのほかの迷い』(1981年)；『乗り間違い』(1988年)；『作家と権力者』(1991年)；『さらばユーゴスラヴィア』(1993年)；『過つは人間の常、そして愛国的。戦争からのセルビア・アフォリズム集』(1994年)；『中欧 - 神話、もしくは現実』(1996年) 最後に挙げた作品では、ウィーンを中心とする都市論で広く文化評論を展開するエッセイが多く収められているが、その他に、彼のエッセイには中欧と東欧の「人と文化」を西欧に紹介する目的で書かれたものも多い。さらにスラブ世界の批判的知識人や優れた作家の紹介や作品翻訳でも、ドールはヨーロッパ各地域を架橋する役割を果たした。(特にドールはクロアチアとセルビアを代表するスラブ文化圏の作家、ミロ斯拉ウ・クルレジャとイーヴォ・アンドリッチを西欧に向け、精力的に紹介している。)

## I. ミロ・ドールの文学世界

### I. 1. 「記憶」と「想起」の文学

小説家としてのミロ・ドールの代表作は既に紹介したように、後に『ユーゴのサガ』と呼ばれるようになった三連作である。作者の分身とおぼしきムラデン・ライコウを主人公とする三作のうち、ここではまず『思い出のほかに何もなし』を取り上げてみる。この作品は日曜の晩から金曜の朝までという一週間足らずの期間を設定しており、ライコウ一族の没落の歴史が語られていく。物語としてこの小説をとらえると、単独の主人公が設定されているわけでもなく、日曜から金曜までという限定された時間枠で、全ての体験が過去のものになっていくという感懐が、登場人物であるさまざまなライコウ一族の者達により綴られていく。ドールの小説群で

は、作者の分身とおぼしきムラデン・ライコウが頻繁に登場するが、『思い出のほかに何もなし』は『休暇中の死者たち』や『白い町』とは異なり、一貫したストーリーの展開は無く、特異である。ムラデンはこの作品では2章分の主人公を勤めるに過ぎない。他のライコウ家の主要登場人物たちも皆本編の何章かを担うだけで、全員副次的で、むしろ著者ドールの主眼は時代に押し流される人間群像の宿命を描くことにあったのではないかとの印象を読者に与える作品である。

人という生き物が全てを過去に押し流し、全て（の体験）を思い出とする時、人の「死」が取りざたされるのは当然といえば当然である。実際、この作品をミロ・ドールは人の死で始め、又人の死への思い出で締めくくっている。この作品の出だしでは、ムラデンからみて叔父にあたるサーシャが友人であるヴィリーの原因不明の自殺を知り、改めて自身も生きる意欲が萎え、生き続ける意味も失っていることを自覚する。この作品の時代設定では作者の少年期である30年代のヨーロッパで、ムッソリーニ、ヒトラー、フランコたちが権力を担い始め、暴力的な専政を行使するこれらの支配者たちが跋扈する時代相が背景にある。『思い出のほかに何もなし』に登場するサーシャは、現実の時代相の影響を如実に受け、小説の中ではスペインに渡り、フランコに対抗する共和主義者たちと共に戦おうと夢想するが、覚醒してみればそれも実行しなかった結果として、苦い幻滅が残るにすぎない。これは一例だが、そのように作者のドールは登場人物を描いていく。

もっとも少したつと、彼（サーシャ）は過去の亡霊として、錆びついた槍を持った、血の気の失せたドン・キホーテとして死ぬのは、ひょっとしてそれほど意味があるものではまったくないことなのでは、との思いを抱くにいたった。もしかすると別の道もあるのでは？<sup>2)</sup> この章での主人公は自身の人生そのものが既に過去のものであると、はっきり悟り、深い喪失感情を抱いてしまう。

さらにこの作品の結末では、主人公のムラデンがやがて迎えるであろう祖父の死に思いをはせ、甘くおセンチな少年時代の体験を全て思い出の中に封印し、大人の仲間入りをするとところで終わっている。ここでも大きな喪失感情が支配的である。

ムラデンがアイススケートの踊り子を初めて見た一瞬のように、時は過ぎ去っていった。そして朽ち果てた秋の公園の丸裸の木々の下で、彼がボッサにキスをした時のように、全ては過ぎ去っていき、もはや決して戻ってくることはないだろう。全て一度は生そのものだった、そして今となっては、すべては次第に弱く、次第に逃げざる思い出以外の何物でもなかった。<sup>3)</sup>

さらにムラデンの視点から見て親しい肉親の生と死、活力と衰退が、対比的に「記憶」と「思い出」を媒介にして「現在」によみがえる、祖父が死ぬのではないかとの予感を抱きながらムラデンは父と叔父と共に見舞いのため列車に乗り込むが、その車中で祖父と共有する懐かしい体験がいちどきに思い出の中から手繰り寄せられる。

(・・・) これら全てのことをムラデンは今でもまったくはっきりと思い出すことができた。しかし祖父が実際にどのような姿かたちをしていたかということになると、それは彼にはわからなかった。かろうじて年老いた祖父がいつも白いフレッシュに糊の効いたシャツを着て、しばらくの間、口ひげを生やしていたことはわかっていた。口ひげは灰色で、祖父がムラデンにキスしたときには、ムラデンの頬はいつもむずがゆくなった。でもそのあと、祖父は口ひげをもう生やしていなかった。やがてこんなことも皆もう大事なことではなくなるだろう。ムラデンが考えるのは、はっきりととどめておく事のできない一瞬一瞬のはかなさであった。(・・・) また祖父の手は湿っぽい庭の土から繰り返し繰り返し一番きれいな花を魔法のように取り出してくれたこともあった：鈴蘭、ライラックの花、昼に咲いたり、夜に咲いたり、なぞめいた雰囲気一杯の花、芍薬、アスターなど、それぞれ季節に応じて。今となっては庭にはアスターだけしかなかったが、やがてそれも枯れてしまうだろう。そして雪だけが庭に残ることだろう。<sup>4)</sup>

ここでも思い出が悲しく苦い体験と表裏一体となり、さらには思い出の内容そのものが人間の衰えや死と直結している。したがって、ミロ・ドールは「記憶」と「思い出」という媒体を小説の中で駆使し、忘却のかなたへと追いやられた人間の存在と死を復権させる試みをしていると言える。小説の中での場面設定や登場人物の心情描写という言語化のプロセスを経て「過去」と「忘却」の中に埋没した人間が「現在」によりがえる。この意味で、彼の小説は死者へのレクイエムとも言える。(特にこの傾向はナチ化したユーゴ政権に抵抗し、死んでいった級友や同志を描く『休暇中の死者たち』に著しい。)

ドールの小説の特異性として挙げられることだが、登場する人間の「思い出」や「記憶」が容易に「現実」や「現在」に溶け込んで、結局読み手の私たちは物語の中の「夢」と「現実」を定かには区分できず、限定することもできない状況におかれる。ライコウ家のスロボダンが気まずい兄弟げんかの後、13年ぶりに弟のドラギに会うシーンを盛り込んだ『巨大熊』の章では、この出会いは夢の中、という設定でドールは書き始めるのだが、読み手の私たちは次第にこの章の主人公であるスロボダン同様、兄弟の話し合いは小説内の「現実」か「夢」の中なのか、判然としなくなってくる。

彼(ドラギ)はもう死んでいるはずだが、という思いがスロボダンの頭をよぎった。不思議だ、目覚めていて、いつでも望めば私は起き上がれるというのに、それなのに夢を見ているのか？私が醒めていれば、彼は私に会いに来ることもできないだろうに。だから私はやはり夢を見ているのだ。それとも私たちの状態はもう醒めているのと夢との間の分かれ目がなくなっているところまで来ているのか？そんなところまで？私は醒めているのに、彼のほうは私のところに来ていて、彼の死んだ眼で私を見つめている。<sup>5)</sup>

弟との対話から、兄のスロボダンは現世で連帯感情を持てる人間を誰一人持てず、弟にも見捨てられたとの思いで、次第に「現世での存在の確かさ」を失っていく。彼に残されたものは「悲

哀」と「寂寥感」のみである。最後には白日夢の中で巨大な熊とスロボダンが死闘を繰り広げるが、彼はここで相手を倒しても、残るのは抱いて立つものがないという崩壊感覚だけである。この章の最後では、スロボダンはさらに自らの死をも自覚するようになる。

彼は死の床についているのだと知った。そして事ここに至った今、それは彼にとって残念なことではなかった。彼の中ではもはや何も抗うものはなかった。そして、何千年にもわたって培われてきた安らぎが彼の目蓋の上へと降りてきた。<sup>6)</sup>

生を継続するとは一種の戦いで、ドールはドン・キホーテのような、あるいは巨大な猛獣を相手とするような人間を描いて、その戦いの不毛さを繰り返し強調する。彼のこの一見消極的で退嬰的な人生を薦めるかに見える否定的処世訓、もしくは広く人生観ともいべき考えはどこから生まれたのだろうか？そしてドールはこのように生に倦みつかれた人間を繰り返し描くことで何を訴えるのか？ドールの作品、その中でも特に彼の作品群の中心を占める長編小説では、テーマはもとより、作品そのものが思い出の連鎖によって構成されているといえる。

『思い出のほかに何もなし』では、このようにライコウ家帰属の者たちの「敗残者列伝」が次々と語られていく。そこで描かれる者たちは人生の生きがいや目的を失い、当然自らのアイデンティティーも見失っていく。ドールが生まれ育った時代の暗さとその時代環境からもろに影響を受け、無力感、喪失感に苦しむ人間を描く作者自身、同類としての素地を持っていることはその描き方を検討しても明らかである。この意味で、崩壊し、失われた国家ユーゴスラヴィアから出て戦争と内乱に明け暮れる日々にしたドールは東欧出自の特異な「ロスト・ジェネレーション」の一員であるのは間違いない。

## I. 2. 「喪失」と「崩壊」、そして「鎮魂」

ドールの連作小説の中で『休暇中の死者たち』は『思い出のほかに何もなし』で登場したムラデン・ライコウがその後成長し、ユーゴの首都ベルグラードで高校生でありながら強権国家への抵抗運動にのめりこんだ時期の成長過程を描いたものである。成立年は逆で、『思い出のほかに何もなし』よりも前に執筆されており、ドールがまだ文学修行の只中にいた時期の作品である。したがってフィクションの度合いが他の長編二作に較べて少なく、主人公は既にドール自身の略歴紹介の箇所ですでに記した通り、政治活動で積極的に行動する人間のストーリーとなっている。主人公は抵抗運動の過程で逮捕され、ウィーンの軍需産業部門での強制労働に就くようになると、ベルグラードから追放され、ウィーンで第二次世界大戦の終結を迎える。小説の結末は終戦直後の混乱したウィーンで、将来への展望なく恥辱と無為に生きるムラデン・ライコウを描いて終わっている。ムラデンの政治活動はヒトラーのナチズムに侵食されたユーゴ政府への抵抗であるから、単なる平和運動のデモ行進への参加や反戦詩の発表といったものだけではなく、ナチ官憲（警官、将校）への武力闘争にまで発展していく。当然、闘争は過激になっていき、ドールたち若者やパルティザンの抵抗運動に加わった者たちは官憲に捕らえられるや、凄

惨な拷問を加えられ処刑されていく。作者が実際に行動し、体験したことを極めて忠実に描写したと目されるこの小説のタイトルは、ある一章の表題にも充てられている。小説全体のタイトルと同じく『休暇中の死者たち』と題されるこの章は、短いながら小説全体の根幹を成し、テーマ全てを語りつくしている。この章前まででは、抵抗運動のさなか捕えられ、死の一步手前までに至るほどの拷問を受け続けるが、同志や級友を裏切るような自白をせず、持ちこたえるムラデン・ライコウの姿が描かれる。この章に至って、ムラデンは延命をはかって自白を始めるが、仲間の名を出さねばならない時は、それまでの尋問中でのやりとりの内容と、自身のこれまで得ていた情報全てを駆使して、仲間としてはもう既に死んでしまっている者の名と、架空の人名を巧みに混せて挙げる工夫を凝らして、まだ生きている抵抗運動の闘士に累が及ぶのを極力避けようとする。この自白が功を奏してか、彼は処刑を免れ高熱を発したこともあって「異端審問病棟 (Inquisitenspital)」送りとなる。ここで彼はブラゾという過激派の同志と知己になり、「自白」、「レジスタンス」そして「敵の暗殺」につき、二人はやり取りするのだが、その会話は抵抗運動の問題を余すところなくとらえている。ブラゾはナチ官憲に属するスパイを実際に殺しており、特殊警察のほうは明白な証拠を得て彼を断罪するため繰り返し拷問にかけている。この状況で彼はムラデンに対し告白する。

僕は諦めて投げ出すことが出来ないんだ。(・・・) やつらが少なくともまともな証拠でも持っていれば・・・しかし持っていない。・・・もうこんな状態は持ちこたえられないと僕も頻繁に考えるようになってきているんだ。<sup>7)</sup>

殺人を犯してはいないが、ムラデンのほうも全てを投げ出し死を選ぶか、持ちこたえて拷問に耐え続けるか、この生と死を分ける極限状況での二者択一を迫られていることで、ブラゾと連帯し、共感し合う。もっとも後者のようにいくら拷問に耐え続けて生きる術を模索しようと、結局は処刑される公算が大であるから、両者の行き着く先は死である。死の引き延ばしともいえるもので、ここにもこの小説のタイトルの含意がある。

特殊警察に収監されている者全員が、休暇中なので死を猶予してもらっている死者予備軍とも言うべき存在である。遅かれ早かれ、待ち受けているのは死という袋小路に陥ったムラデンとブラゾが突破口のない対話を続けているところに登場するのが特殊警察警部のグレイチヒで、彼は鞭で拘留者たちを拷問にかけるのが生きがいのようなサディストの官憲である。彼はムラデンを引き合いにして彼だけでなく、病棟収監者全員にまで引導を渡す意図をもった言葉を発する。

グレイチヒは立ち去る前に言った:「ライコウどん、お前さん自身も逃げ出そうと企ておったな。わしらのところでは、奴さんは死んでいく人間の印をずっと身につけてしまっているのに、自由になれそうな兆しがあると、急に元気いっぱいになるってな按配よ。お前さんはもうこの病棟には必要以上には一瞬たりとも、もうとどまれんようにしてやるからな。」(・・・)

「俺たちは『休暇中の死者たち』なんだ」とブラゾはグルイチヒが語ったことに直接関連付けることなしに云った。しかし彼はその言葉で、ムラデンがこのとき感じ取ったことを直裁に表現していた。<sup>8)</sup>

この章の末尾で、このように小説のタイトルが意味するところが明らかとなる。ムラデンやブラゾが収容されている病院は入院患者が完全に健康を取り戻すところではなく、異端審問所のような病棟であって、拷問に耐え、苦痛を十全に感じ取れるだけの体力がつけば即刻退院させられて監獄へ再び送り込まれるまで、しばしの間留め置かれる病棟である。或いは、この病院を退院できる別の形は、死者として解放されることでしかあり得ない。「休暇」という言葉には絶望感から出た皮肉が込められており、死を迎えるまでの、つかの間のモラトリアム期間にすぎない。

ここで描かれているところのいわゆる「死に至る休暇」から受けるイメージはこの書の巻頭言にこめられた死生観の内容に直結する。ミロ・ドールが引用するヘラクレイトスの言である。

不死の者たちは死すべき運命にあり、死すべき者は不死の運命にある；彼らは互いに彼らの死を生き、彼らの生を死ぬ。<sup>9)</sup>

ギリシャの多神教での死生観では、当然現世での「不死」の神々と、「死すべき」人間世界の対立項がある。ヘラクレイトスの格言を人間世界からの視点でドールの小説のテーマと結びつければ、人間とは「生きているものの、死んでしまっている者」でもあるし、「死んでしまっているものの、生きている者」でもある。この考え方に至るまでに、作者のドールはさまざまな人間の生き方や死に様を体験してきた。特にナチ政体迎合のユーゴスラヴィア王国への抵抗運動の過程で、そして特殊警察に捕らえられて以来、これらの体験を後になって全て踏まえた上で、彼は人間の「生」と「死」の意味を極限まで考え続けたに違いない。この意味で『休暇中の死者たち』は後に中欧信奉者となった東欧出自の作家が東欧のベルグラードで精神と肉体の両面で文字通り極限にまで追い詰められた体験をありのままに書いた特異な「抵抗文学」である。<sup>10)</sup>

### I. 3. 「忘却」と「清算」、そして「再生」

ミロ・ドールの三連作小説の中の『白い町』では、主人公のムラデン・ライコウや語り手の「私」は極端なまでに客体化されている。物語の語りの口調では冒頭、「私」と「作者」は同一人物の別称として設定されているようでもある。加えて、ここでは「作者」は皮肉なタッチで自分自身に対してインタビューを試み、叙述の内容そのものは、このような場合に通例見られるような「私小説」の内容でもないが、そうかといって又「作家論」や「小説論」といった類のものでもない。構成はフランスのシュールリアリズムの手法に倣ったところがあり奇抜な叙述部分もあるにはあるが、叙述内容は全体としては常套的なもので、ベルグラードを出てウィーンの町に居住し、西欧に同化し始めている主人公ムラデンを描いている。また別のシーンでは、ムラデンと「私」は互いに分身同士のようにも見える。特にインタビュー形式が多用され、主人

公から脇役まで登場人物たちは客体化され、さらには彼らの内面はその都度さまざまな「語り手」によって冷徹に突き放されて分析されていく。以下は、「私」がなぜムラデンという人間に肩入れして物語を語ることになったかの大義名分を説明する箇所である。

(・・・) 否、同情ではなくむしろ身内のものが感じ取る愛着、もしくは連帯感というようなものでした。私はこれまで彼を一連の奇妙キテレッツな状況において、おまけに腐敗のスキヤンダルにも巻き込んでしまったことがあったわけですから、このヘルデンプラッツ（英雄広場：ウィーンの王宮脇にある）で彼を見かけた一瞬だけで、無造作に物語から消してしまう構成にしてしまうに忍びず、彼にふさわしい過去と未来を彼に与えないではおれなかったのです；彼は自らの運命に対し権利がありますし、それは他の人たちの運命とは異なるもので、それでいて同時に、彼と私たち全てとを、兄弟同士の関係のように結び付けるものでした。<sup>11)</sup>

このシーンでよく判るように、小説の中ではこの後ムラデンが体験した過去と、これから迎えるであろう彼の未来、そして未来への展望が語られていく。

前二作では縁者の死、家系全体の没落、さらには圧政によって友人や同志が死んでいく様が語られていったが、この三作目ではライコウの未来への言及が出てきたように「死」「破壊」「崩壊」といった通常の否定概念だけでなく、人生肯定的な概念でライコウの生き様を検討するシーンもさまざまなヴァリエーションで出てくる。したがって前二作とは異なりこの作品では「忘却」や「はかなさ」の感情に繰り返し苛まれるだけではなくて、逆に現世肯定的にこの世に引き止める「拠り所」を見出していく人間をも、ドールが肯定的に描き出しているところに注目することも必要である。このことは特にタイトルに上った「白い町」を語り手がどのように描写しているかを検討すれば明らかとなる。

白い町。この言葉で多くのことを表象することができます。ちなみに、ベオグラード（ベルグラードの別名）も「白い町」と呼ばれております。なぜそう呼ばれているのかと申しますと、午後遅くに北西部、つまりゼムリンから列車に乗ってベオグラードに近づけばわかることですが、サヴォ川の対岸に階段状に上へと盛り上がっていく家並みは夕映えの輝きのもとで、本当に白くまたたくのですよ。(・・・) ただしですね、ムラデン・ライコウの言い張るところによりますと、これは小説のタイトルのほんの一つの見方にすぎませんよ、ということになります。どんな青春も思い出の中では一抹の白い町の中で繰り広げられるものです。もっとも灰色すぎて、慰めようもないままに青春は過ぎ去っていくのかもしれないがね。(・・・) 失われたパラダイスを小説に書いてみたいなど、夢でしか得られない幻想を求め続ける企てじゃないかと、ライコウにはっきりわからせたりすると、「白い町」は彼にとっては雪に埋もれたヨーゼフシュタットなんだよ、と彼は私に説明しました。

これは、彼が実際に生活しているウィーン第八区のことですがね。<sup>12)</sup>

小説の中ではこの町の描写をムラデンや「私」などではなく、脇役であるパウルが友人として、



ムラデンの行状と彼の作品を批判的に評価しながら行っている。語り手のパウルはライコウが執筆中の小説を『白い町』と名づけた形容を適切だと判断しており、そのことでこの命名が普遍的で一般的に妥当なものという印象を読者が持つようになるとの、作者の配慮も読み取れる。

『白い町』の意味内容は多義的である。さらには、引用箇所を読んだだけでも、主人公のムラデンはすでにベルグラードよりもウィーンのヨーゼフシュタットにより同化していることがわかる。極端に言えば自身の青春を過ごしたベルグラードを捨て、なじみ深い居住の町としてムラデンはウィーンを選び取ったと言える。過去に視点を向ければ、前二作で、特に『休暇中の死者たち』で中心を占めていたベルグラードは、既に青春の墓標として忘却のかなたへ押しやられ、その顕在化は記憶によって可能になるだけである。実際に作者のミロ・ドール自身にとっても、ヒトラーに併合されたオーストリア第一共和国が第二次世界大戦終結と共に崩壊した後、もっとも馴染みができ親しみ深い居住空間がウィーン第八区のヨーゼフシュタットになっていった。

ここでドールの小説世界で展開される「時」の問題を検討する。現在進行のプロット設定といった小説の構成や未来の展望など、或いはヴィジョンを語ることなどに、ドールは重きを置いていない。作者、もしくは物語の語り手が描く時代は過去であり、「歴史的現在」という語りの手法を用いても、内容は過去である。現在の事柄が盛り込まれる場合にあっても、常に過去からの流れの帰結としての「今・ここ」という現在の捉え方である。上記の引用でも「今・ここ」でライコウにとって親しみ深くなってきたウィーン第八区もライコウが体験した過去の遍歴をまって初めて価値を持っている。小説の「時空間」を特に重要視すれば、「過去」への偏重が「思い出以外に何もなし」と「休暇中の死者たち」に顕著であり、それに対して「現在」を機軸に展開する構成をとるシーンが多いのが『白い町』の特徴といえる。小説の「現在性」に客観性を持たせるため、ミロ・ドールは『白い町』では最も技巧的な構成を考えた。フランスのシュールリアリズムの手法も取り入れ、人物像も複数のパースペクティブ（観点、見方）で描写し、当然さまざまな角度から登場人物を批判的にとらえるように読者を仕向けている。この作品ではランボーを巻頭言に引いているのはその表われであるし、「私は他者である（独文：Ich ist ein anderer）」と表白する人間にとっては自己規定もままならないと、ミロ・ドールはこの言から読み取っている。この複層の現実世界を表わす手法として、ドールは個々の人間描写だけでなく、人間関係、そして歴史的背景などの事象についても多層の枠組みで解釈できるような余地を描写のテクニクとして残している。

ドールは自身の存在、そして自身の未来像に関し、自分自身ですら自己規定できないという立場から、ユニークな数式自己像をライコウに適用している。

父親 + 母親	- 現世の重み =	ムラデン・ライコウ
無 限 性		

13)

シュールなダダイズム風の奇想による自己規定である。規定と書いたがこの数式によってミロ・ドールの作り出したムラデン・ライコウの人物像はますます拡散していくイメージを読者に与える。拡散と書いたが、そうなるに拡大への連想が紛れ込んでくることもありえる。しかし作者ドールの意図するところはそうではなくて、次のようなムラデン・ライコウの本性を暗示するところにある。つまり、両親という有限の存在を無限性によって分割するわけで、しかもその残余からさらに有限世界にある「現世の重み」を引き去ることでやっとムラデンの本体が計量されるわけだから、その本体とはむしろ逆に極小化していき、その存在のあり方は、むしろ自己流動化、浮遊化の形をとるのかもしれない。「有限」を「無限」で割るという本来不可能な数式によるドール流のシュールリアリズムの表現であり、非論理的ながら主人公の存在そのものを言いえて妙な説得力がある。

さらにこの小説の終盤にさしかかると、自ら選び取った「故郷」であるウィーンになじんだかにみえるムラデン・ライコウは自問自答の形で相も変らぬ「異端者」の自己を分析する箇所も出てくる。ドールはこの章を「デコンポジション (Dekomposition)」と名づけ、今一度自己を見つめなおそうとするムラデンを描いている。

(・・・) というのも、お前は昔からそうだったし今もそうだが、ここでは縁のない人間だ、固まった秩序にとっては敵で、死者の友であって、お前は死んだものたちの中で生きており、死者と一緒に腐敗していく。なぜお前は今もうろつき回っているのだ、休暇中の死者であるお前は？なぜお前は空気を毒で汚すのだ、なぜかきむしるような声でお前とは違う人たちの心憎いばかりの落ち着きを乱すのだ？あの人たちは忘れてしまうことができるし、記憶も過去も無しで生き、ただただ「今の今日」に身を任せ、今のあり方に満足しているというのに。なぜお前はあの人たちをお前の意地の悪さに満ちた夢で怖がらすのか？<sup>14)</sup>

ここでは過去を忘れてしまえないムラデンの姿が強調されており、また彼の見方から言えば、周りにいるウィーンの人たちは「記憶」と「過去」を消し去ることのできる、自らとはまったく異なるタイプの人たちである。長年生活して慣れ親しんだと思える町ウィーンにあっても、ムラデンはよそ者であり異端者であるとの気持ちを拭い去れない。ムラデンはここでまさに自己の再検討、つまり自己の構成 (Komposition) の解体をはかり、そこから自己の「再構成」を将来志向していくとも読み取れる。今日のポスト構造主義の理論を適用すれば、「脱構築」のプロセスを、ドールは主人公の造形に既に適用していたといえる。

自己と他者を「記憶」によって区分する判断には、ムラデンからみて周りの他者に対する感情としては、羨望と皮肉という相反する思いが潜んでいる。このようなムラデンを表現できた

作者の拠り所とするところはやはり「記憶」と、そこから手繰りだせる「思い出」に集約できる。批判的に言えば「記憶」とは決して払拭できない作家の「業」のようなもので、ミロ・ドールのような作家にとっては常に立ち戻る、あるいは立ち戻らざるを得ない創造の原点である。

『白い町』の結末のつけ方では、作者のドールは「パースペクティヴ」という最終章を設け、主人公ムラデン・ライコウの行く末を占う形で複数の生き方を提示している。ムラデンは人間個人間の深いつながりとしての「愛」も成就するものではなく、かつて理想とした国家の実現を可能とする「革命」もまた成就するものでもないと悟ってしまっている。それにもかかわらず、この小説の結末が陰鬱にならないのは、主人公がとにもかくにもウィーンで定住して、40代の中年になるまで生活してきたという「生の重み」を得たからである。この生活体験そのものから、ムラデンの将来はブティック経営の女主人や未亡人との結婚生活、もしくは共同生活で開ける未来、あるいは独身にとどまって身軽に中欧・東欧を旅してドキュメンタリー映画やノンフィクションものの本を発表できる未来など、さまざまな可能性が開けると、ドールは最終章で示唆している。確かにミロ・ドールは作家としての創造力や批判精神を発揮しなくとも、セルビアやハンガリーなど中欧・東欧での生活体験をもって、或いはオーストリアにまで移動してウィーンで定住してしまうこととなったその生き方で、既にヨーロッパ各地域の架橋の役割を果たしている。ウィーンにどのように、そしてどの程度同化したかは別問題として、ドールは少なくともスラヴの一面である「陰鬱さ」を脱して、ウィーンでは再生に向け「生の軽み」を体得した。

## II. 時代との対峙 — 真の「故郷」を求めて —

### II. 1. 世代の共通時代感覚

ミロ・ドールには強烈な崩壊感覚が宿っていることを既に指摘したが、これはドールの場合、大げさに言えば殆どトラウマとして彼に取り付いた個人的感情の帰結といえる。他方、これを戦前・戦中派の回顧から、共通の時代認識として確認することもまた可能である。つまり、第一次世界大戦と第二次世界大戦の狭間に位置する両大戦間期には、ドールと同じ、もしくはきわめて似通った時代意識を持ってその後の人生を生き抜いた同時代人が存在したからである。その典型例をドイツに見れば、まずハイナー・ミュラー (Heiner Müller, 1929 - 1996) が挙げられる。彼は20世紀に2人の独裁者を経験してきており、3つの国家の崩壊を見てきた。独裁者とはヒトラーとスターリンであり、ワイマール共和国、ナチ・ドイツ、ドイツ民主共和国 (東ドイツ) という三国の崩壊はミュラーに強烈な印象を残した。ミュラーの国家崩壊に対する受け止め方は独特である。インタビューを受ける形で自伝的なものを包括的にまとめた『戦闘のない戦争』の中で、「1992年初頭の今日、この消滅していく国家 (略称DDR, 旧東ドイツ) のことをどういう風に考えていますか?」との質問にミュラーは次のように答える。

作家にとって一つの生涯の中で3つの国家が崩壊していくのを見るのは一つの特権ですよ。言っているのはワイマール共和国、ファシズム国家、そして旧東ドイツのことですね。ドイツ連邦共和国の崩壊を私が体験することは恐らくもうないでしょう。<sup>15)</sup>

このように、彼は国家と言うものは必然的に崩壊するものという観念を抱いていることがわかる。劇作家としても演出家としても、国家と個人の間を揺れ続けたミュラーの場合、演劇分野での芸術活動の成果は第二次世界大戦後に結実したとはいえ、国家観そのものは既に兩次大戦間期から形づくられてきたことがわかる。その端緒の時代相、そして国家という機構からひたすら崩壊と没落を導き出す考え方から、北米のヘミングウェイに倣って、ミュラーをヨーロッパ型ロストジェネレーションの作家とも呼べるだろう。

青春期にはセルビア、そしてユーゴスラヴィアを自身が帰属する国家とし、その後20代から主として戦後のオーストリアで生き続けたドールの場合はどうであろうか？ミュラーと比較して、彼も多感な青春時代までさかのぼって興味深い発言をしている。

私の名付け親としての2人の独裁者（スターリン、ヒトラー）、国家の崩壊（セルビア王国、ナチ・ドイツ、ナチ親和のオーストリア）<sup>16)</sup>

望まずして、たまたま帰属した国家が連続して崩壊する過程をつぶさに体験し、そこから、ドールは何ものにも頼れない、どのような国家なりと安易に帰属するべきではないとの結論を得た。ドールにとっては元来国家そのものが信頼のおけない、疑わしい存在で、たとえそのような国家に帰属しているというような意識が持てるとしても、ドールにとっては自身のアイデンティティーを確立することにはまったくならない。このように、ドールもまさにミュラーと同様の崩壊感覚を徹底して味わったことで、典型的なロストジェネレーションの一員となっている。

崩壊と喪失の感情はミロ・ドールの場合、同化できなかった国家や、親しい人々への思い入れに表現されている。このことはこれまで既に見てきたとおりである。専制的封建国家としてのセルビアやユーゴスラヴィア、そしてヒトラーのナチズムへと加担していく国家へ帰属できないという自己認識から、ドールの場合、思想と政治の局面では国家への抵抗運動が自己のアイデンティティー確立の拠り所となる。

さらに帰属意識を国家に対して持てないドールは心の拠り所として「より大きな故郷」を想起し、作家としてはその内実と理念を追求するようになる。これは否定されるべき国家の代替物であり、ドールはその在所を「中欧 (Mitteleuropa)」と規定する。中欧概念はこの言葉が出来て以来、さまざまな人間によって、さまざまに理解されてきた。ドールの中欧概念に関して、ヴェストファールは次のように説明している。

中欧はまさにもはや存在しないからこそ、領土の模範例であり、個々の人間が思い起こし探すことで新たに領土とされるものである。中欧とは現実には決して具体的に把握できるものではないが、反面また完全に到達不可能な域にあるわけでもない。

おぼろげに予感できる中間領域にあり、そこを中心に考えると中欧は殊に根無し草の人間

に対しては絶大な魅力を及ぼす。—このような人間とは、彼らにとって故郷という言葉がこの拡大され、永遠に変転し続ける空間の中でのみ、意味を得るといったタイプの者たちである。<sup>17)</sup>

正真正銘のデラシネであるドール、より肯定的に言って生涯正真正銘の故郷の地を求め続けたコスモポリタンのドールのような人間タイプは、まさにヴェストファールというところの中欧に抛り所を得、ひたすらこの領域で「故郷」を探索する。(ヴェストファールはシャザーレンというヨーロッパ史上忽然と消失した民族からドールが出自したのではないかという仮説から出発してドールの特異性を検討するが、この民族性と性格形成との関連についての論拠が正当か否かはここでは扱わない)

## II. 2. 汎ヨーロッパ志向に向けて

ドールの主要長編小説では既に見てきたように、徹頭徹尾国家の崩壊と個人の挫折が描かれている。そしてドールが味わった生活体験そのものがそのような小説世界に直接影響しており、この意味で小説は自伝的な要素大で、ドールの場合にあってはこのようにフィクションの世界の中ではむしろドールという個人が生々しく描出されている。その対極としてはウィーンで徐々に生活の基盤を固め、壮年期より次第に発表する量が増えていったエッセイや評論などノンフィクションの中で、ドールはむしろ生身の自画像を強く打ち出さず、国家や社会の機構であれ自己であれ、描く対象から距離を置き、醒めた客観的理論を展開している場合が多い。

ここでミロ・ドールが「より大きな故郷」を求めて汎ヨーロッパ思考に至った道程を辿っておきたい。論理的な思考が重要となるので、当然彼の小説世界で描かれた世界観だけでなく、むしろそれ以上に彼のエッセイや評論文の中に盛り込まれたドールの国家観や民族理論が問題となる。

「より大きな故郷」をドールが求めていった下地には、現実に生まれ育った土地や町に対して彼は複雑な思いを抱いていたことが挙げられる。たとえば幼年期を過ごして本来懐かしいはずの大ベチュケレクにも、ウィーンに住み始めて以来およそ20年間、ドールは足を踏み入れなかった。この町への思い出と逡巡の後に再訪を果たしたドールはこの「都市再見」をエッセイにまとめ、そのタイトルを『もはや存在しない町で』と記している。再訪を果たした時にはこの町はユーゴスラヴィアのパナートにあり、簡単に行けない理由をドールは次のように説明する。

(・・・) そうこうするうちに私はウィーンに行き着いてしまい、そこからは私は危険な目にもあわずに、私の元の故郷においてそれは旅行できなくなっていました。<sup>18)</sup>

ユーゴスラヴィアのベオグラードでのギュムナージウム(中学・高校)時代では親ナチ政府に対して抵抗運動に加わったドールは、逮捕され追放されてウィーンに行き着き、第二次大戦後東欧へは短期の滞在以外では戻らなかったわけだから、この前歴も考慮して大ベチュケレクやベルグラードなど、かつての故郷への帰還・永住は危険を伴うと、ドールは察知していた。こ

のエッセイでは町のたたずまいはほとんど変わっていないと綴りながら、上記のタイトルをつけたところに、過酷な時代の影響があったことを、ドールは自身で認めている。したがって時代の推移として、ドールはオーストリア＝ハンガリー二重君主国の崩壊、それと同時に第一次世界大戦、さらにはその後の「なおより大きなラディカルな変動」を指摘する。地政学的には町は変わらず確固と存在するにもかかわらず、ドールの心の中ではこの町はもはや存在しないも同然なのである。あるいは言葉を変えて言えば、ドールが理想とする生き方をこの町で生活する人たち自身が捨ててしまったことで、この町は回顧の中でのみ存在し、その意味で現在に至っては、もはやこの町は存在しないともいえる。エッセイの最後でのドールの感懐である。

私はこのことがわかりませんでした：このヨーロッパの心臓部でひっそりと失われた状態で、私たちの激動の時代の波に洗われて、一つの町が存在していたということ。今日よりもっと幸せな時代に属していて、その時代には質朴に生きる術（すべ）を、人々は今日よりもはるかに良く心得ていました。<sup>19)</sup>

以上は一種の「失われた故郷を求めての回顧録」ともいうべき内容で、代替物としての「より大きな故郷」の模索の一例だが、ウィーンでの定住を始めてからのドールは、より積極的に「故郷」を求め、獲得していこうとする。それと平行して自身の出自を考慮して、彼は東西ヨーロッパの相互理解に貢献することが自身の使命であると自覚するようになっていく。偏狭な地域や特定の民族に固執する考え方からの脱却である。『乗り間違い』という自伝的エッセイでドールは国家主義や民族主義からの脱却を説いている。

一人のウィーンの友人があるとき言ったことがあります：「オーストリア人であることはある決まった民族性に帰属しているという証明を出すのではなくて、一つの世界観への証明を出すことなのです。」<sup>20)</sup>

これはドールがオーストリアのウィーンに住み着いてから繰り返し、「オーストリア人とは何か、その特性は？」と考え、自己のアイデンティティー確立という結論を出そうとする時、繰り返し引用される言説である。この友とはイェルク・マウテ（Jörg Mauthe）のことで、彼の追悼文を起草したときもドールはマウテのこの論を引用している。先にドールが持ち続ける国家への疑念を紹介したが、ここではドールはさらに「民族性への帰属意識」についても疑念を呈している。

つまり、いわゆる国家意識というものの背後には、頻繁にみられることですが、一群の野蛮人が持つ、何ら根拠を持たない迷妄以外には他に何も無い、ということを彼らは知っています。<sup>21)</sup>

彼らとは、ドールにとって理想としての「あるべきオーストリア人」であり、かつてのオーストリアは多民族国家であったため、民族ごとに高揚したナショナリズムによって崩壊に至ったことを認識し、国家主義の弊害を理解できたはずであるとするのがドールの主張で、これがまたドールの国家主義や民族主義排斥の根拠となっている。そのような人間タイプを措呈して、

何らかの国家に属する民族が本来希求すべき理想像を打ち出している。この意味での「世界観」を共有できればドールは自分自身も喜んで「オーストリア人」でありたいと率直に書いている。

『中欧 (Mitteleuropa) - より大きな故郷を求めて』(以下『中欧』と略記)では、さまざまな町や地域を親しみ深い「故郷」として挙げている。しかし言及されている都市や土着的な土地がどのような国家に属しているかに関しては、ドールの関心は薄い。この政治文化に関する紀行記『中欧』で、ドールはかつてのハプスブルク帝国やオーストリア=ハンガリー二重君主国治世下での文化の拠点を探索するが、それらの地域や町は現在どのような国家に帰属し、どのような政治体制が敷かれているかなどに関してはドールの関心は向かわない。扱われている各地域は「より大きな故郷を求めて」の途次にあるドールにとって、精神的にも心情的にもどれほどに「故郷」に近いかという尺度で検討されている。「中欧」という概念が成り立ち、単なる「神話」に堕さないための前提として、ドールは必要不可欠な二つのコアを提示する。

1. 「中欧」の地域を縦横に巡りさまざまな文化圏を仲介できるユダヤ人が存在すること。

1. さまざまな民族や国家に属する人間たちがコミュニケーションをはかれるための共通言語としてドイツ語が認知されること。<sup>22)</sup>

この意味で、ドールは「中欧人」としてウィーンに定住してより、文学言語としてもコミュニケーション言語としてもドイツ語を中心に活動を続けてきた。小説世界で繰り返し展開された「絶望」, 「崩壊」, 「喪失」など、人間を奈落へ引き入れる心情は、生活者としてのドールの表現形態や行動様式から鳴りを潜め、彼は努めて西欧・中欧・そして東欧の相互的架橋の役割を勤めるようになる。さらに、反権力を志向する中・東欧作家たちの、主としてセルビア語やクロアチア語で書かれた作品を精力的にドイツ語に翻訳し、西側に紹介する。これに対し、その仕事の量は比較すると、より少ないが、逆に西側の文化を中・東欧文化圏へ紹介もしている。

## II. 3. 国家対個人、もしくは民族対個人の相克

第二次世界大戦後の異なる国家の発展状況を、それ以前の過去での歴史的経緯をも踏まえ、ドールの民族・国家観と関連付けながら検討する。ドールがウィーン市民として第二次世界大戦後帰属することとなったオーストリア第二共和制国家は過去から現在に至るまで同じドイツ語文化圏に属することもあってドイツと常に比較検討されてきた。ドイツの場合、第二次世界大戦後、国家の分裂が起こり、社会主義経済国としての「ドイツ民主共和国」と資本主義経済国である「ドイツ連邦共和国」が成立した。ナチス・ドイツが残した負の遺産を戦後「過去の清算」として、いかに克服するかがドイツの大きな課題であった。その課題は二国に課せられたものであって、本来両国ともに克服すべきものだったが、奇妙なことに東ドイツのほうは「ナチズムあるいはファシズム」とは対極にある「社会主義」を国家ドクトリンとし、結果としてナチズムに抵抗した者たちが建設した国家として、負の遺産継承を免れたといえる。結果として「過去の克服」は西ドイツの責務となったのである。

これに較べてオーストリアのほうは1955年に中立宣言を伴う国家条約を締結したおかげで、戦後の国家分裂を免れた。しかし、そのことでかえって一国の中で隠微に「過去の克服」が問題になり、時々取りざたされるものの、かつての西ドイツのように精神的に「過去の清算」に取り組まなかった。この問題に直接関連のあることだが、第一共和制の末期にヒトラーのナチス・ドイツに併合された歴史的事実は、一方でナチスに全面的に迎合した帰結であるとする歴史観と、他方ではまったく正反対の、抵抗したがヒトラーの強権軍事体制に屈服せざるを得なかったとする歴史観を生み出した。このようにオーストリアでは、中立の第二共和制国家の成立によって国家の分裂は免れたものの、第二次世界大戦参入と敗戦という歴史的事実からしても、オーストリアは「過去の清算」に真摯に対処すべきであった。しかし、ドイツとは違ってオーストリアではそれ以前に「ドイツへの併合」という歴史的事実にも戦後冷静な検討を加えなければならないのに、この問題も戦後すぐには解決されないままに、隠微な形で残り続けた。

晩年でのミロ・ドールの反体制運動は「ドイツへの併合」を正当化し、「過去の清算」という問題を曖昧模煇な形で残し続けるオーストリアの政治体制と社会へ向けられた。特に、高級将校としてナチズムのユダヤ人・移民輸送政策に直接かかわった過去を秘して、国連事務総長を勤め、さらにオーストリア大統領選にまで立候補し、実際に大統領に選ばれたクルト・ワルトハイムへの反キャンペーンにドールは積極的に加わった。西欧・中欧・そして東欧の架け橋としての自覚を持ったドールがさらに先鋭に政治運動に加わる契機となったのは、ボスニアでのムスリム、クロアチア人、セルビア人たちの争いを端を発した民族紛争であり、三者はそれまで互いに異なる民族同士にもかかわらず共存しあっていたわけだから、この民族同士の抗争は端的に言って骨肉相食む近親者同士の戦いであった。三者のうち、特に大きなジェノサイドを目的としているような殺戮命令を発し、実際に戦争という名のもとに多数を殺害した狂信的国家となったセルビアに対して、ミロ・ドールの批判は向けられた。セルビアはまさにドール自身の「私の故郷」であり、さらには元々のナチ抵抗運動の友人や同志が支持した国であるからこそ、ドールの苦しみは増し、それに伴って彼の批判は先鋭になる。以下は、かつての学友で反体制運動の同志でもあったミハイロ・マルコヴィッチに対する公開書簡であり、セルビアへの決別宣言でもある。マルコヴィッチはスロボダン・ミロシェヴィッチの腹心として与党社会党議長の立場で他民族を抑圧した張本人だった。

私は不思議に思うことですが、君は君の党のラディカルな国家主義的政治を支持してきましたね。その政治はバルカン色の強い、度し難いほどに単純なファシズムの手助けをしたわけです。その政策はサイコパスのヴォイスラヴ・シェシエリのチェトニク軍団や他のSS（ナチス親衛隊）のような軍隊もどきの師団にも役立ってきました。これらはしかし今日では逆に君の党そのものを脅かすようになっています。<sup>23)</sup>

1993年公刊の『さらば、ユーゴスラヴィア』の末尾に寄せられた書簡の一部だが、ドールにとってはナショナリズム（国家主義）こそ常に諸悪の源泉である。時代は移り変わっても「国家意



識」や「民族意識」をドールは首尾一貫性を以って徹頭徹尾拒否している。

オーストリア国内ではドールは「ナチズムの影響」と未消化の「ナチズム克服」は戦後無くなることなく持続していると確信しており、その端的な表われはイェルク・ハイダー（Jörg Haider）が信奉するネオナチズムのイデオロギーで、ドールはそれに対する反キャンペーンでも重要な役割を果たした。ウィーンでは1990年代に至って、危険なファッショ的政治風土が戦前への先祖がえりのように現実に再び強く醸成されていった。ハイダーは最も保守的とされるケルンテン州の自由党党首にとどまっていたが、オーストリア全体の右傾化現象と平行して次第に自党の得票数を伸ばし、地方議会だけでなく国政レベルでも大きな影響力を行使し始めた。ドールの作品のタイトルに選ばれた1999年には国民党と連合し、自由党の代表が閣議入りするという非常な伸張ぶりを見せたが、結果としてアメリカ合衆国とEU（欧州連合）諸国によって「制裁決議（Sanktion）」をオーストリアは受けた。その後、自由党は内部分裂を起し国政選挙でも敗退し、現在では極右のハイダーもケルンテン州の地方政治家にとどまり、最後には不慮の交通事故死（2008年）をとげ、オーストリアの右傾化の問題は全般的に一応の政治的決着をみた。

エッセイ風政治小説ともライコウ三部作の続編とも取れるドールの『ウィーン、1999年7月』では、老いたライコウが登場しウィーンの政治的状況を分析する。この主人公は「私」という語り手の「友人」として登場するが、本来の作者であるミロ・ドールの面影を伝えている。さらに、敵陣営からのライコウのプロフィールも紹介されている。

健康な民衆の体に取り付いたセルビアの、そしてコスモポリタンの蠅。

崩壊した共和国が腐肉であるとする、それに喰らいついている秃鷹。<sup>24)</sup> 小説の中の形容語であるとはいえ、当時ハイダーに代表される極右の政治路線に呼応して、実際にマスメディアの一部はこれらの言葉を用いてドールを貶めようとした。ウィーンで市民権を既に得ているドールに対してもこのような表現が使われていたわけだから、オーストリアでの当時の外国人排斥運動の激しさが理解でき、さらにはその運動が戦後も持続していたということをも推測させるところがある。

かつては自身を「ハンガリーで生まれ、ベルグラードで成長したセルビア人」と自己規定したが、民族紛争で自壊した国家ユーゴスラヴィア、さらにはセルビア共和国に対してもドールは決別宣言をした。これは既に見てきたとおりである。それにもかかわらずドールはウィーンの外国人排斥運動の潮流の中では、あいつも変わらず出自の故国と民族に絶えず結び付けられて批判されている。

『ウィーン、1999年7月』というドールの作品は小説内の記述に従えば一種の「近未来小説」とも解釈できる。つまり、ハイダーのネオナチズムへの反キャンペーンへの参加を契機として書いたと目されるこの小説はドールの言に従えば、「ムラデン・ライコウは、勿論1999年の夏ではなくて、既に1996年から1997年の冬にかけて書き上げてしまっていた。それに加え、1996

／1997年の時点で強大化していくファシズムの運動を叙述したということは、現実にはハイダーの自由党が強大化していき、2000年に与党内の一党となって入閣を果たしている事実にかんがみて、ドールは殆ど未来を予測していたともいえる。

さらに小説内で語り手自身は興味あることに、次のような断り書きを入れている。

何人かの方々は、ライコウ氏がここで登場しているハーゼルグルーバー（極右政治運動家としての登場人物）でイェルク・ハイダーを想定していたと簡単に思ってしまうかもしれません。ハイダーはオーストリア内政では極右に位置する者で、最近では小市民層から次第次第に多くの賛同者を獲ち得ていますが、さらにまた若干の富裕でいて同時に鷹揚とはいえないタイプの企業家の支持も享けています。<sup>25)</sup>

さらに続けて、語り手はハーゼルグルーバーのイメージとして、一度は退けたハイダーを再び引き合いに出し、「ライコウ氏は、不用意に発せられたハイダーの発言を文字通りにとって実行に移すようなハイダー心腹者の一人を想定した」<sup>26)</sup>、と説明している。以上の諸点を総合的に考えれば、ドールはハイダーに限定せず、むしろ極右ファシズムの普遍的な問題をより一般的に、より先鋭に提起する意図を持っていたと解釈される。

ハイダーの問題が現実にはウィーン中央政界で沈静化し、EU諸国も安堵したように、ドール自身もオーストリアの健全な批判的自浄の精神を見逃してはいない。これまで一方的にウィーンの危険なファシズム的傾向を強調したが、ドールはそれに抵抗する力を多分にユートピアのトーンも含めて指摘する。

ひとたび危険なときが到来すれば、オーストリアの若者たちは街路に繰り出し、自由と人権とみなしたもののためにデモ行進を行うでしょう。それはごく最近にベルグラードで学生たちがよりヒューマンな世界を導入するために驚嘆すべき一徹さで、そしてファンタジーの気持ちを豊かに持って、デモを行ったと同様のことが起こりましょう。<sup>27)</sup>

さらに語り手は「信じがたいほどの愛憎」<sup>28)</sup>でウィーンと結び合っている主人公の夢を語り、小説は終わっている。

ムラデン・ライコウの姿が見えるのですよ。彼は目にははっきり見えませんが、常に居続ける敵に対し自由でコスモポリタンのウィーンという夢を守っているさまですがね。<sup>29)</sup> 中欧のウィーンというかつての一帝都に帰属しつつ、逆にまた常に距離も置くというバランス感覚から、ミロ・ドールは小説世界でも、日々の生活空間でもヨーロッパの西側から東側まで架橋の役割を良く果たした作家であったと結論付けられよう。

## 注

- 1) Milo Dor, *Meine Reisen nach Wien und andere Verirrungen* (München-Wien 1981), S.271. なお、ミロ・ドールとウィーンの関係については既に別稿で詳しく検討した: 生田真人, 「ウィーンへの帰属と抵抗 - ミロ・ドール -」, 141 - 174 頁。平田達治編, 「ウィーン, 選ばれた故郷」(東京 1995) 所収。
- 2) Milo Dor, *Nichts als Erinnerung* (Salzburg 1993), S.25.
- 3) A.a.O., S.285.
- 4) A.a.O., S.284-285.
- 5) A.a.O., S.262.
- 6) A.a.O., S.269.
- 7) Milo Dor, *Tote auf Urlaub* (Salzburg 1992), S.173.
- 8) A.a.O., S.181-182.
- 9) A.a.O., S.5
- 10) ドールはフィクションを極力排しており、戦後カナダでドールがこの小説で用いている名前どおりの旧ナチ党員が現実に逮捕された。これはほとんどノンフィクションともいべきこの作品の効用であったが、逆にこの作品はドールの修行時代に完成し、さらにドールの最初の長編小説であるため、事実をありのままに書いた箇所も多くなったためでもあろうか、否定面では冗長な箇所も多い。
- 11) Milo Dor, *Die weiße Stadt* (Salzburg 1994), S.14.
- 12) A.a.O., S.208-209.
- 13) A.a.O., S.267.
- 14) A.a.O., S.275.
- 15) (Hg.) Heiner Müller, *Krieg ohne Schlacht, Leben in zwei Diktaturen* (Köln 1994), S.361. この引用箇所に先立って引用した質問文も同上の箇所から。
- 16) Milo Dor, *Auf dem falschen Dampfer* (Wien-Darmstadt 1988), S.39-57. ここで挙げたエッセイのタイトルそのものが、『私の名付け親であるヒトラーとスターリン』となっている。
- 17) Bertrand Westphal, *Milo Dor und das Chasaren-Syndrom*. In: *Milo Dor - Budapest-Belgrad-Wien. Wege eines österreichischen Schriftstellers*, hrsg. v. Jacques Lajarrige (Salzburg-Wien 2004), S.83.
- 18) Milo Dor, *Meine Reisen nach Wien und andere Verirrungen*, S.265.
- 19) A.a.O., S.270.
- 20) A.a.O., S.303-304.
- 21) A.a.O., S.303.
- 22) Milo Dor, *Mitteleuropa - Mythos oder Wirklichkeit* (Salzburg 1996), S.18.
- 23) Milo Dor, *Leb wohl, Jugoslawien* (Salzburg 1993), S.137.
- 24) Milo Dor, *Wien Juli 1999* (Wien 1997), S.7-8.
- 25) A.a.O., S.117.
- 26) A.a.O.
- 27) A.a.O., S.118.
- 28) A.a.O.
- 29) A.a.O., S.119.

# Coming to Terms with the Past by the Means of Memory

— Milo Dor's contribution to the construction of a interdependent relationship for  
Western, Central and Eastern Europe —

Masato IKUTA

## Abstract

Before Milo Dor (1923-2005) finally decided to reside in Vienna, he had been through several kinds of cities: Budapest, Groß-Betschkerek in Yugoslavian Banat and Belgrad. In order to understand his life and works, we have to become aware of the time in which he spent his childhood and youth. He once named 2 notorious despots, Stalin and Hitler, with an undertone of irony his own "Godfathers". He lived once in Belgrad under the reign of violence and a tyrannical dynasty which first led to fascism, then communism. So this background got Dor to participate in the resistance-movement against the Yugoslavian regime connected to Nazi-Germany.

Of Dor's main novels, *Nothing other than memory* (original title: *Nichts als Erinnerung*), *The Dead in Vacation* (*Tote auf Urlaub*) and *The White City* (*Die weiße Stadt*). The first novel describes the fall and death of close relatives of Family called Raikow, a representative of which Mladen Raikow, a self portrait of Dor, will continually act as a main hero in the following novels. The second novel goes into the problem of self identification and the struggle with a sense of belonging to state or home town. The content of those novels gives us an impression, as if Milo Dor were attempting to reconstruct and rehabilitate the existence of his close relatives, friends and confidantes by the medium of memory. Otherwise they would have been totally forgotten in the history or in the family-chronicles. The third novel, *The White City*, deals with Mladen Raikow's effort to assimilate to Western Europe. Considering his conclusion that one should reject fanatic nationalism and instead strive for the "bigger home (*größere Heimat*)", we could be convinced that his author, Milo Dor, in spite of belonging to the "lost generation", could identify with united cosmopolitanism as an ex-serbian and self chosen Viennese citizen born in Budapest.

Adding Dor's works like literary and political essays and translations and further his political activities in Vienna to his work as a novelist, we could finally come to a conclusion that he contributed to mutual cultural exchange and political understanding between Western, Central and Eastern Europe.

**Keywords** : Coming to terms with the Past, Milo Dor, memory, resistance – movement in Yugoslavia, Vienna and Belgrad,